

ビバハウス便り NO.95 「毎日が修学旅行！」

2014年1月23日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

明けましておめでとうございます。1月10日までは冬休みということもあり、久方ぶりに色々なことを思い、考えさせられました。そんな中でもほっとして、心和む場面もありました。

昨年の暮れから新年にかけての大雪で事務室の窓の近くのレンギョの樹が幹から折れて小枝もろとも散乱し、それはそれは痛々しい姿になってしまいました。これまで春一番に黄金色の花を咲かせ私たちを元気付けてくれてただけに、私はそのまま放置することが出来ずに、「よーし、春を待たずに一番に花を咲かせてあげよう！雪が解けたら土に返してあげよう！」そう考えて室内に入れて見守ってきました。今日23日には願いどおりに満開！

満開とともに、もうひとつの喜びが重なりました。折りしも、ビバの卒業生で、昨春北星余市高を卒業し、希望かなって地元茨城の大学へ入学したけれど、体調を崩し休学中のOさんが、気力、体力づくりのためにとビバに里帰り中で、ビバ生活の中で体調が整ったため、この25日には復学準備のため実家に帰ることが出来るまで元気になりました。私には満開のレンギョと笑顔で出発準備中のOさんが重なって見えるのです。

新年スタートの特長は、13歳、18歳、19歳と未成年者が3人もそろったことです。それぞれに特別な困難に苦しみながらビバに入ってきた少年たちが、まるで仲の良い3兄弟のようにはしゃいでいる姿に、ある古参のメンバーは、「毎日が修学旅行のようで、うるさくて大変だ」とこぼしていました。

そういえば去年ビバハウスを視察していただいた、茨城県つくば市の「つくば子どもと教育相談センター」にかかわる和気ご夫妻のお便りには、「～引きこもりの青年を立ちあがらせることは、簡単ではありません。いくら熱意を持ってしても、居場所を提供することさえ難しいのです。笛吹けど踊らずで、なかなか居場所に来てくれません。～そんな中で常に10人もの青年が集う余市のビバハウスは唯一とも言える居場所の成功例です。～」と述べて、ビバハウスの他の施設との違いを、「地の利、人の利、天の利」で分析してくださっていることを思い出しました。

現在の日本社会の崩壊過程の前兆のような、すざましい家庭崩壊、親子関係の断絶と憎しみ合い(多くの場合児童・幼児虐待がある)の中から、家族の中にも居場所もなく、さまざまな経由を得てビバにたどりついた若者たちが「毎日が修学旅行のように」にぎやかに仲良く生きられるとするならば、これ以上のことは望めないのかもしれない。

